

## パフォーマンス評価 実施ガイド

Here We Go!の評価に関する情報は、国立教育政策研究所教育課程研究センターによる『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）第1編～第3編』を参考にして作成しています。詳しい学習状況の評価の進め方については、上記の資料をご覧ください。

### 1. 「パフォーマンス評価」とは

このガイドでは、各単元に示してある評価規準のうち、「話すこと【やり取り】」「話すこと【発表】」についての総括的な評価のために、それぞれのパフォーマンス評価を記録に残す方法について示しています。はじめに、評価規準とは「つきたい力」のことを指し、それに対して評価基準とは「どの程度到達できたか」を判断する指標のことをいいます。評価はその基準に照らして行うことが大切です。

*Here We Go!* では、パフォーマンス評価で評価する対象は主に、単元のゴールに設定されている *You Can Do It!*の言語活動を想定しています。テストという名前で授業外に独立した形の言語活動を設定するのではなく、単元の学習の自然な流れの中にある言語活動で、身につけた英語の力を使って話す力を評価することを推奨しています。また、緊張した中でテストを行うよりも、普段一緒に学習している友達と、自らの力を発揮して活動にチャレンジする児童の様子を見取ることが大切と考えています。全単元のゴール活動をすべてパフォーマンス評価の対象とするのではなく、十分な指導と学習の後、各学期に一回、後半の単元で総括的に見取することを推奨しています。これは、特定の言語材料を使えたかではなく、つきたい力がついているかどうかを評価するためです。

### 2. ねらいと留意点

パフォーマンス評価を通して、児童の「できた感」「達成感」を積み上げることで英語の使用や次の学習への動機付けにつなげ、また教師の指導改善へと生かすことがねらいです。

評価時にすべての児童が自信を持ってゴール活動に臨めるよう、単元を通した指導が必要となります。ゴール活動の際に必要な力を把握し、ゴール活動に向けて活動を設計するとよいでしょう。また評価の際には、評価者によって評価のずれが生じることは避けなくてはなりません。そのためには、学年単位で評価基準を決めておくことが大切です。まず年度初頭に「B」のレベル感、具体的なパフォーマンスのイメージを共有することから始め、目の前の児童の実態を見て、基準を設定するようにしましょう。

### 3. 評価のために必要なもの／準備するもの

パフォーマンス評価にあたっては、冒頭で示した通り、単元で「つきたい力」に対して「どの程度到達できたか」を判断する上で、指導者間で共有するための指標が必要となります。評価のずれを防ぐためには、「ルーブリック」と呼ばれる評価基準表を用意するとよいでしょう。指導者は観点別評価の3観点のそれぞれにおいて、つきたい力を踏まえて具体的に何を見取るのかといったポイントとなる評価項目を設定し、児童のパフォーマンスを見取るようにします。

また、指導者は評価をする前に、どのような点からどの程度のパフォーマンスを期待されているのか、児童と評価項目および評価基準を共有することが大切です。パフォーマンスのよい例と改善点を含む例を示して、児童にどの点が良いのか改善の余地があるのかを考えさせることで、評価される項目の具体的なイメージを掴ませるようにします。それにより、児童は自分なりに練習したり目標を調整したりすることが可能になります。これは3観点のうちの「主体的に学習に取り組む態度」につながるものです。

資料では「話すこと【やり取り】」「話すこと【発表】」について、以下の単元のルーブリック例を示して

[Ver.1] 2020. 6. 12 作成版

いますので、ご参照の上ご活用ください。

5年 Unit 2【やり取り】When is your birthday?

Unit 6【発表】I want to go to Italy./Unit 6【やり取り】I want to go to Italy.\*

Unit 9【発表】My hero is my brother.

6年 Unit 3【やり取り】What do you want to watch?

Unit 6【発表】This is my town./Unit 6【やり取り】This is my town.\*

Unit 8【発表】What do you want to be?

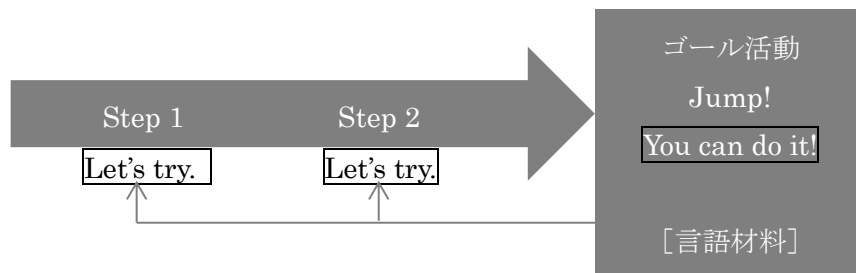
\*ゴール活動が【発表】のスタイルでも、各学校の評価計画に応じて【やり取り】について評価をしたい場合には、やり取りのスタイルに変更して活動を行うことも可能です。その場合のループリック例を示してあります。

#### 4. 評価の流れ

このパフォーマンス評価は、基本的に「単元内」での実施を想定しています。ゴール活動準備およびゴール活動の時間を活用するようにします。

##### ① 授業準備

- ・パフォーマンス評価をする単元のゴール活動と評価規準（「つきたい力」）を確認し、「（児童を）こういう姿までもっていきたい」というイメージをしっかりと共有しておく。その上で、評価項目と評価基準を考えながらループリックを作成する。
- ・児童と事前にパフォーマンス評価を行うゴール活動の内容や、評価基準を共有し、評価される項目の具体的なイメージを掴ませる。
- ・最終のゴール活動に向けて、必要な力を段階的につけるような活動を組み込むなど、言語活動を「逆向き設計」する。



##### ② 授業内での事前活動

- ・事前活動の中で児童のでき具合を見ながら活動のレベルを調整したり、指導を追加したりする。
- ・児童の活動の様子を見ながら、必要な助言を与える。

##### ③ パフォーマンスの実施

- ・【やり取り】では、質問に答えることだけでなく、自ら相手に質問することも大切な要素となる。児童同士のやり取りのうち、返答だけではなく、質問についても見取るようにする。
- ・【発表】では、グループ発表であっても、児童一人一人が発話するように促す。

\*実施にあたっては、ALTなどに児童のサポートをしてもらいながら、指導者は評価に集中することが望ましい。

##### ④ 事後指導

- ・パフォーマンスのよい例をクラス全体で共有し、指導者から良かったところをフィードバックする。
- ・児童に振り返りの機会を与え、指導者は振り返りの記述等を参考にして次回の指導に生かす。
- ・C評価がついた項目が多かった児童については、個別にフォローアップをするとよい。何が難しかったのか、どうすれば少しでもよいパフォーマンスができるのか、どのような足場が必要か、児童と会話をし、指導者がどのようなサポートをしたらよいか考える。